名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団 設立記念

Teatro Nagoya

イタリアオペラ ガラコンサート

Concerto di Gala "Opera Italiana"

2017 7/2（日）14:00開演（13:15開場）

東海市芸術劇場 大ホール

主催：名古屋テアトロ管弦楽団 / 合唱団

後援：東海市教育委員会

鈴木オーケストラ応援財団 支援事業

ごあいさつ

名古屋テアトロ管弦楽団 / 合唱団 代表　上井隆志

本日は名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団の設立記念演奏会にご来場頂き、誠にありがとうございます。今日のこの日を迎えることができて本当に嬉しく思います。イタリアオペラを中心に上演するオーケストラと合唱団の同時創設、いわゆる“オペラカンパニー”としてのアマチュアでの設立は珍しく、全国的にも初の試みなのではないでしょうか。

このオーケストラと合唱団は、私ども夫婦で立ち上げましたが、きっかけは、毎年暮れに行われる音楽仲間（地元で活躍する歌手やアマオケのメンバーなど）の集まりでした。お互いのコンサートなどを聴き合ううちに「いつか一緒にオペラがやれたらいいね」と話していましたが、それがついに今日実現するのです。

プロの声楽家として活動してきた妻と、長年アマチュアオーケストラで活動してきた私ですが、この団を立ち上げてから何度となく意見がぶつかり合いました。激しく議論することはもう日常茶飯事。。。しかし、皆さんの暖かいご支援とご協力により、ひとつずつ乗り越え、解決してきました。何としてもこのプロジェクトを成功させる!という目標があったのでここまで来ることができたのだと思います。

テアトロの練習はまず合唱団が先行し、第1回目の練習が昨年の6月5日、オケとの合わせ練習は7月30日からで、いずれも和やかでアットホームな雰囲気で始まりました。3月には今回の予行演習のつもりで武豊の「知多半島国際音楽祭」に出演しましたが、震災復興支援のチャリティーコンサートということもあり、心に沁み入る感動的な演奏に、客席も団員自身も感動の渦に包まれました。その打上げでの団員の満足した笑顔が忘れられません。

今回演奏する曲は、いずれもオペラファンならずとも知っている名曲ばかり。オペラの定番でもある「椿姫」「ラ・ボエーム」「カヴァレリア・ルスティカーナ」の3つのオペラからは、単にアリアを演奏するだけでなく、そのオペラの中核部分をすっぽりと抜き出した形で演奏します。また、凛々しい男声二重唱が楽しめる、ドン・カルロの「我らの胸に友情を」や、バリトン歌手の誰もが憧れる「アンドレア・シェニエ」の名曲“祖国の敵”そして「カヴァレリア・ルスティカーナ」と「マノン・レスコー」からは、単独でも頻繁に演奏されるほど美しい“間奏曲”を演奏します。「椿姫」での華やかな“乾杯の歌”、「カヴァレリア・ルスティカーナ」の教会で歌う美しい“讃美歌”。「アイーダ」での荘厳な“凱旋行進曲”では、15本の金管バンダが華やかなフィナーレを飾ります。本日の2時間でオペラの醍醐味を存分に楽しんで頂けるプログラムとなっています。

客演指揮者としてお迎えする、佐藤正浩マエストロは、国内外でご活躍中ですが、特にオペラ界では人気の指揮者です。フランス・リヨン国立歌劇場の首席コレペティトールとしてのご経験から、歌手からの信頼は絶大なものがあります。3月の初回練習では、オケも合唱もかなり緊張した雰囲気で始まりましたが、練習するにつれ音楽が生き生きとし、最後にはその場にいた全員が演奏する喜びに満ちたものとなりました。本番は、熱く充実したものになると確信しています。

最後に、本日の演奏会は、マエストロをはじめソリストや団員、グランフォニックさんやソラーリスさん、京都ファインアーツさん、裏方スタッフさん、それぞれのご家族の皆様など、多くの方々のご尽力とご協力なくしては成り立たなかった演奏会です。ご支援頂いた総ての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。心よりお礼申し上げます。

いよいよ私たちの晴れの舞台の幕開けです。この一年の成果を聴いて頂くとともに、オペラの世界を少しでも身近に感じて頂けると幸いです。どうぞごゆっくりとお楽しみください。

Conductor Profile

指揮
佐藤正浩
Masahiro Sato

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。ジュリアード音楽院ピアノ伴奏科修士過程修了。

1993年、サンフランシスコ・オペラのオーディションに合格、専属ピアニストとして活躍を始める。1995年、指揮者ケント・ナガノの招きでフランス・リヨン国立歌劇場の首席コレペティトールとなり、ナガノ氏のもと2つの世界初演を含む数多くのプロダクションの成功に導く。また、チョン・ミョンフン、ゲルギエフ等のアシスタントとしてパリ・シャトレ座、ラヴェンナ音楽祭（イタリア）、ウィーン芸術週間などで活躍。1999年、イギリス・ダーティントン音楽祭で「イドメネオ」を指揮しデビュー、翌2000年にも同音楽祭に招かれ「ナクソス島のアリアドネ」を指揮、また同年新国立劇場で「オルフェオとエウリディーチェ」を指揮し日本デビューを果たし脚光を浴びる。近年では日生劇場「泣いた赤鬼」「カルメン」、新国立劇場「トスカ」、藤原歌劇団／文化庁公演の「愛の妙薬」、また東京オペラ・プロデュース公演「放蕩者のなりゆき」（ストラヴィンスキー）を指揮し、「音楽現代」紙上で“私が注目する指揮者たち”の一人に挙げられる。大阪いずみホールで「ランスへの旅」を、東京室内歌劇場でプーランク「人間の声」、マスネ「マノンの肖像」を、ひろしまオペラ・ルネッサンスでプーランク「カルメル会修道女の対話」と「カルメン」を指揮、また2012年新作オペラ「白虎」の初演で佐川吉男音楽賞受賞。2013年12月には三善晃「遠い帆」を仙台で指揮、2014年8月には新国立劇場で同オペラを再演。さらに9月には、ヴェルディ「ドン・カルロ」のフランス語版を日本初演。2015年12月、藤原歌劇団公演でヴェルディ「仮面舞踏会」を指揮。2016年2月にはサン=サーンスの大作オペラ「サムソンとデリラ」を指揮、また同年10月の名古屋二期会公演で「蝶々夫人」を指揮、成功を収める。

これまでに読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪センチュリー交響楽団等を指揮。愛知県立芸術大学講師、慶応義塾ワグネル・ソサィエティー常任指揮者。

「ガラコンサートに寄せて」 佐藤正浩

ここ数年の、東海地区におけるアマチュアオーケストラの隆盛には目を見張るものがある。『マーラー・ツィクルス』であったり、『ワーグナー・リングサイクル」であったり、企画も無謀だが（笑）、しかしその壮大な夢を次々に実現し、着実に成功に導いてきている。この域に至るまでにどういう歴史を辿ったのかは知らないが、どの地方にも負けない、とてつもなく熱い情熱が働いているのに違いない。

その熱い情熱が、今度はイタリアオペラを上演するオーケストラを創り上げた。それも、合唱団を併設して。こんな夢のようなオーケストラが他にあるだろうか!!

今回はその旗揚げ公演とも言えるコンサートの指揮を仰せつかった。タクトを持つその手にも自然と力が入る。溢れ出る情熱をコントロールし切れるか些か不安もあるが、必ずやイタリアのパッションが爆発する、記念碑的コンサートになるであろう。

Program

ジュゼッペ・ヴェルディ
Giuseppe Verdi

『ナブッコ（ナブコドノゾール）』より
"Nabucco（Nabucodonosor）"

- **序曲**
- **"祭りの飾りを"**
  合唱（ヘブライ人たち、レヴィ人たち、ヘブライの少女たち）

『椿姫（ラ・トラヴィアータ）』より
"La traviata"

- **前奏曲**
- **乾杯の歌 "友よ、いざ飲みあかそう"**
  ヴィオレッタ／上井雅子　アルフレード／鈴木泰雄
  フローラ／宮田靖子　ガストーネ子爵／蜂須賀一晃
  ドゥフォール男爵／田中純一　ドビニー侯爵／西 祥濃
  医師グランヴィル／森 翔吾
  合唱（祝宴の客たち）
- **アルフレードのアリア "燃える心を"**
  アルフレード／坂本　肇　アンニーナ／外山佳子

『ドン・カルロ』（イタリア語4幕版）より
"Don Carlo"

- **ドン・カルロとロドリーゴの二重唱**
  "彼だ、王子だ！～我らの胸に友情を"
  ドン・カルロ／鈴木泰雄　ロドリーゴ／中原　憲
- **"ここに喜びの日があけた"**
  合唱（民衆および修道士たち）　金管バンダ

— 休　憩 —

ジャコモ・プッチーニ
Giacomo Puccini

『マノン・レスコー』より
"Manon Lescaut"

- **間奏曲**

『ラ・ボエーム』より
"La Bohème"

- **ロドルフォのアリア "冷たい手を"**
- **ミミのアリア "私の名はミミ"**
- **ミミとロドルフォの二重唱 "愛らしい乙女よ"**

ミミ／上井雅子　ロドルフォ／宮崎智永

ウンベルト・ジョルダーノ
Umberto Giordano

『アンドレア・シェニエ』より
"Andrea Chénier"

- **ジェラールのアリア "祖国の敵"**

ジェラール／中原　憲

ピエトロ・マスカーニ
Pietro Mascagni

『カヴァレリア・ルスティカーナ』より
"Cavalleria Rusticana"

- **讃美歌 "天のお妃さま"**
- **サントゥッツァのアリア "ママも知るとおり"**

サントゥッツァ／大田亮子　マンマルチア／山本　馨
合唱（教会の内と外の民衆）

- **間奏曲**

ジュゼッペ・ヴェルディ
Giuseppe Verdi

『アイーダ』より
"Aida"

- **"エジプトとイシスの神々に栄光あれ"**

凱旋行進曲～バレエ音楽

合唱（エジプトの民衆・祭司たち）　金管バンダ

Soloist Profile

ソプラノ
上井雅子
Masako Uwai

愛知県立芸術大学 声楽科卒業。故滝沢三重子、神田幸子、江唐澄江の各氏に師事。イタリア フィレンツェにて、S・レガッチ氏のレッスンを受ける。名古屋市文化振興事業団「天国と地獄」(ヴィーナス)、「サウンドオブミュージック」(マルガレッタ)、Northみえシティ・オペラ「カルメン」(ミカエラ)、愛知祝祭管弦楽団 パルジファル(小姓)、ワルキューレ(オルトリンデ)などに出演。2002年電気文化会館にてソロリサイタル。2012年より毎年5月、宗次ホール「母の日」ランチタイムコンサート開催。合唱や声楽の指導者としても活動している。

メゾ・ソプラノ
大田亮子
Akiko Ohta

名古屋音楽大学卒業。同大学院音楽研究科声楽専攻修了。特待生奨学金を授与される。2004年イタリアミラノに留学し、国際声楽アカデミー"A. マントヴァーニ" にてディプロマ取得。「カヴァレリア・ルスティカーナ」サントゥッツァ役でデビュー。往年のプリマドンナ「M. オリヴェーロ女史102歳記念コンサート」にて L. ヌッチ氏と共に出演し、好評を得る。第40・42回イタリア声楽コンコルソ　シエナ部門ファイナリスタ。2014年に帰国し、後進の指導、合唱指導にも力を注いでいる。名古屋音楽大学講師。

テノール
坂本　肇
Hajime Sakamoto

テノーレ・リリコ。これまでに「ナクソス島のアリアドネ」(タンツ・マイスター/プリゲラ)、「ルイザ・ミラー(日本初演)」(道化)、「ラ・ボエーム」(パルピニョール、プラム売り)などオペラ舞台のほか、各種コンサートへの出演など。主に愛知県芸術劇場合唱団メンバーとして、県文化振興事業団主催のオペラやコンサートでアンサンブル、アンサンブルソリストを担当。井原義則、二神二朗、佐野成宏、武田陽子ほか諸氏に師事。第12回大阪国際音楽コンクール入選　第20回尾東音楽コンクール銀賞。

テノール
鈴木泰雄
Yasuo Suzuki

大学在学中に大学合唱団および社会人合唱団に所属して合唱活動を開始。大学卒業後、愛知芸術文化センターの開館記念シリーズの一環として上演された名古屋二期会「ピーター・グライムズ」へ参加、オペラに魅了される。以降、日生オペラ「愛の妙薬」「魔弾の射手」、愛知県文化振興事業団プロデュースオペラ「ランメルモールのルチア」、三河市民オペラ「トゥーランドット」、四日市市民オペラ「アイーダ」等に出演。2013年には四日市市民オペラ「椿姫」にガストーネ役でソリストデビューを飾った。

テノール
宮崎智永
Tomonaga Miyazaki

Ah! mes amis, quel jour de fête! (「連隊の娘」ハイC×9回)、Credeasi misera(『清教徒』最高音ハイF)等をもレパートリーとする超高音リリックテノール。愛知県文化振興事業団主催公演を中心に全国のオペラ、コンサートに出演しており、あいちトリエンナーレ2010『ホフマン物語』では「音楽の友」誌で「芸達者な歌い手」と頌された。第10回大阪国際音楽コンクール日本人男声最高位。'11年Vicenza国際音楽祭(世界遺産 オリンピコ劇場)日本代表。

バリトン
中原　憲
Ken Nakahara

早稲田大学法学部卒業。法務博士(専門職)。最近のオペラ出演には、あいちトリエンナーレ2013「蝶々夫人」ヤクシデ、NCOオペラ「フィデリオ」ドン・ピツァロ、長久手オペラ「ホフマン物語」ダペルトゥット、三重音楽発信「ドン・ジョヴァンニ」マゼットをはじめ、「アマールと夜の訪問者」メルヒオール、「友人フリッツ」アネッツォ、「あまんじゃくとうりこひめ」とのさん、「じごくのそうべえ」閻魔大王などがある。宗教曲のソロや『詩人の恋』等のドイツ歌曲、『木の匙』等の日本歌曲も歌っている。故神卓也氏に師事。

オペラ通!テアトロ団員による

曲目解説

『ナブッコ』*Nabucco*／“序曲”“祭りの飾りを”

解説：竹田大輔（Tp.）

【作曲】ジュゼッペ・ヴェルディ（1841～42年）
【初演】1842年3月9日　ミラノ・スカラ座
【出典】『旧約聖書』

あらすじ

第1幕：時は紀元前、エルサレムの神殿の中

バビロニア王ナブッコは長女アビガイッレとともにユダヤの国に攻め込みます。ユダヤ教の大祭司ザッカーリアは「ナブッコの次女フェネーナを人質にしている、大丈夫!」とユダヤの人々を励ましますが、フェネーナと恋仲にあったユダヤ王の甥イズマエーレによって彼女は解放され、ナブッコは戦いに勝利します。

第2幕：バビロニアの王宮

自身が奴隷の子であること、ナブッコが次女フェネーナに王位を譲ろうとしていることを知ったアビガイッレは王位を奪う野望を抱き始めます。一方で、フェネーナがイズマエーレのためにユダヤ教に改宗したことを知った父ナブッコは「ユダヤを征服した私がユダヤの王で神なのだ!」と激怒し叫びます。その瞬間、神々の逆鱗に触れ、彼は雷に打たれて精神錯乱状態になってしまいます。

第3・4幕

この隙に長女アビガイッレは王位を奪い、錯乱状態のナブッコにユダヤ人処刑の命令書への印を押させます。ユダヤの人々は故郷エルサレムを想い、「行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って」を歌うのでした。正気を取り戻したナブッコは、ユダヤの神に許しを請います。そしてフェネーナとユダヤ人の処刑を阻止するため、兵を率いて彼らを解放し祖国に帰るように言います。野望を砕かれたアビガイッレは毒薬を飲んで自決します。ザッカーリアはナブッコを王の中の王として讃えました。

“序曲”　～コラール（讃美歌）から始まり、オペラのストーリーをダイジェストで表現～

24小節目～第2幕、祖国ユダヤを裏切ったイズマエーレがヘブライ人に罵られる場面です。
54小節目～第3幕で歌われる有名な合唱曲「行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って」。
135小節目～第2幕、アビガイッレが野望を抱く胸の高鳴りを表現しています。
154小節目～第1幕フィナーレ。ユダヤの神殿で短剣を突き付けられたフェネーナをイズマエーレが助け出す場面です。
204～225小節目　第2幕で王位を奪ったアビガイッレが有頂天になる場面です。

ひとこと　冒頭のコラールはやっぱりチンバッソですよね。この1曲のためだけにでもチンバッソを用意してもいいくらいの価値があると思います。

“祭りの飾りを”

第1幕、いよいよユダヤの神殿が陥落というところで「祭りの飾りよ 落ちて砕け散れ!」と、ナブッコが略奪を宣言する場面です。

ひとこと　この曲は戦争の曲です。そのためか、僕たち金管楽器に休みがない…キツイです…

『椿姫』*La traviata*／"前奏曲"～"乾杯の歌""燃える心を"

解説：竹田大輔（Tp.）

【作曲】ジュゼッペ・ヴェルディ（1853年）
【原作】アレクサンドル・デュマ・フィスの戯曲『椿姫』
【初演】1853年3月6日　ヴェネツィア・フェニーチェ座
【舞台】19世紀半ば、パリ

あらすじ

第1幕：パリ、ヴィオレッタの館

社交界一人気の高級娼婦ヴィオレッタの館では華やかな宴が催されています。以前からヴィオレッタに恋をしていた青年アルフレードは、彼女にその気持ちを告白します。本当の恋愛などに縁はないと思っていたヴィオレッタは、彼の純粋な愛の前にとまどうのでした。

第2幕：パリ郊外

2人は社交界を離れ、パリ郊外の家で静かに幸せに暮らしていました。

ある日、アルフレードの留守中に、彼の父ジェルモンが訪ねてきます。ヴィオレッタの娼婦という過去が、アルフレードの妹の縁談に差し障りとなるので、息子と別れるよう彼女に迫ります。ヴィオレッタは自分の真実の愛を必死で訴えますが、結局はジェルモンに説き伏せられ、泣く泣く別れを決意します。

かつてパトロンだった男爵とよりを戻すという手紙を残して、彼女は家を出ていきます。手紙を読んだアルフレードは、彼女に裏切られたと激怒し、パリの社交場まで追いかけて行き復縁を迫りますが、ヴィオレッタは男爵を愛していると苦しまぎれに言ってしまいます。アルフレードは逆上して大勢の人前で彼女をひどく侮辱します。真意が伝わらないヴィオレッタはその場で気を失ってしまいます。

第3幕：ヴィオレッタの自宅

数か月後、ヴィオレッタはベッドで横になっています。実は難病におかされていて、自分の最期が近いことを彼女は知っていました。全ての事情を父から聞いたアルフレードが駆け込んできて、許しを請います。二人はまた一緒に暮らすことを誓いますが、時すでに遅くヴィオレッタは過ぎ去った幸せな日々を思い出しながら、息を引きとります。

"前奏曲～乾杯の歌"

1幕冒頭、弦楽器による哀愁を帯びた旋律から前奏曲が始まります。ヴィオレッタの悲しい運命を暗示するかのようです。それを打ち消すかのようにオーケストラのユニゾンが鳴り、軽快な音楽が鳴る舞踏会へと場面転換します。ヴィオレッタが現れ、ガストーネ子爵に連れられてアルフレードが登場します。子爵に1曲歌うよう勧められ、アルフレードはヴィオレッタへの想いを歌うことを思いつき、そのまま乾杯の歌へと続いていきます。1番はアルフレードのヴィオレッタへの想いを、2番はヴィオレッタが楽しく飲みましょうとあしらいながら、間奏の合唱を挟み、少しずつ2人の距離が縮まっていきます。最後に合唱が入り華やかに曲を締めくくります。

ひとこと　1幕の前奏曲はロ短調、3幕は同じ旋律をハ短調で演奏します。一般的にですが、ロ短調は哀愁を、ハ短調は悲劇を表現するといわれており、ヴェルディは見事にこの調性を利用しています。

"燃える心を"

2幕冒頭です。短い序奏に続いて、ヴィオレッタとともに田園生活をしているアルフレードが登場します。「あの人から離れて僕に喜びはない」というレチタティーヴォを歌います。続いて、ヴィオレッタへの愛を率直に歌う「燃える心を」になります。「あの人と一緒にいるとすべてを忘れてしまう、天国にいるようだ!」と（恋は盲目そのものですね）。そこに女中アンニーナが登場し、実はヴィオレッタが2人の生活のために全財産を売り払ったことを知らせます。この知らせに驚き、彼女が売り払った全財産を取り戻すためパリへと向かう決意をし、カバレッタ（オペラでよく使われる同一リズムで盛り上がっていく手法）で曲は締めくくられます。

ひとこと　アンニーナが登場するまえの弦楽器のユニゾン部分はかなりの難所です。うまくいけば緊張感が出ます!曲のクライマックスにテノール最大の見せ場、高いCの音が出てきます。

❀『ドン・カルロ』*Don Carlo*／“我らの胸に友情を”“ここに喜びの日があけた”

解説：竹田大輔（Tp.）

【作曲】ジュゼッペ・ヴェルディ
【初演】1884年1月10日　ミラノ・スカラ座※　※フランス語5幕版の初演は1867/3/11パリ・オペラ座
【原作】フリードリヒ・シラーの戯曲『ドン・カルロス』　【舞台】16世紀中頃、スペインのマドリード

あらすじ

スペインの皇太子ドン・カルロはフランスの王女エリザベッタと恋に落ちますが、フランスとスペインの講和条約が成立し、彼女はドン・カルロの父フェリポ2世と結婚することになってしまいます。エリザベッタを忘れられずに思い悩んでいるドン・カルロのもとへ親友のロドリーゴがやってきて、フランドルのプロテスタントを救うことを勧めます。彼らは宗教上の理由で国王の弾圧を受けていました。

舞台はバヤドリードの大聖堂前の広場。人々が群がり、そこに僧侶が大審問にかけられる人を連れてきます。やがて王が到着すると、ドン・カルロに連れられたフランドル人の代表が国王の許しを求めますが、国王は応じず、二人は捕えられてしまいます。

ドン・カルロの処分に悩む国王。やがてドン・カルロの牢へロドリーゴが救出にやってきます。彼はフランドルの民衆を扇動したのは自分だと宣言し、ドン・カルロの身代わりになって銃弾に倒れてしまいます。警鐘が鳴りドン・カルロを支持する群集が乱入した隙に、以前からドン・カルロに思いを寄せていたエボリ公女が手引きをして彼を逃がします。

偉大なるドン・カルロ5世の墓前にエリザベッタがいます。逃げ延びてきたドン・カルロが彼女をみつけて、ふたりは永遠の別れをかわします。そこへ国王一行の追手がやってきます。すると突然墓が開き、僧侶の姿をしたドン・カルロ5世の霊が現れ、ドン・カルロを連れて墓の中に消えていきました。

“我らの胸に友情を”

1幕1場。エリザベッタへの思いを捨てきれず、思い悩むドン・カルロに親友ロドリーゴがフランドルのプロテスタントを救うことを勧める場面です。ドン・カルロとロドリーゴの二重唱です。思い悩むドン・カルロの心境から打ち解けていく2人の様子が掛け合いなどで見事に表現されています。

ひとこと　ソリスト2人の練習のピアノ伴奏を一度させていただきました。男声2重唱、素晴らしい迫力です!! 掛け合いがとても難しい曲なのですが、今回のお2人ならドン・カルロとロドリーゴのように息を合わせられると思います!

“ここに喜びの日があけた”

2幕2場。バヤドリードの大聖堂前の広場。群集と大審問にかけられる人を連れてくる僧侶。そんな中、国王が到着します。フランドルの人々を救うようドン・カルロが国王に懇願する場面です。

ひとこと　大聖堂で鳴り響くファンファーレはバンダで演奏されます。盛り上がる場面ですね。

❀『マノン・レスコー』*Manon Lescaut*／“間奏曲”

解説：森光政浩（Tb.）

【作曲】ジャコモ・プッチーニ　【原作】アベ・プレヴォーの同名小説。
【初演】1893年2月1日　トリノ・王立劇場　【舞台】18世紀末　フランスと植民地アメリカ ルイジアナ

この物語は、類い稀な美女マノンの生涯を描いたものです。美しさに相反して着いてしまう、イノセントさ（無邪気さ）が仇となって物語は波乱万丈な展開を見せます。あらすじだけ見てしまうと、あり得ないドタバタな話なのですが、プッチーニの手に掛かるとあら不思議、芸術になってしまう。このパターン、オペラには多いです。間奏曲はその破天荒な物語の第2幕と第3幕の間で演奏されます。数奇な運命を暗示する不安定さと共に、この世の美を全て集めたような作品に仕上がっています。単独でも演奏される佳作です。

『ラ・ボエーム』*La Bohème*／“冷たい手を～私の名はミミ～愛らしい乙女よ”

解説：森光政浩（Tb.）

【作曲】ジャコモ・プッチーニ（1893～96年）
【初演】1896年2月1日　トリノ・テアトロ・レッジョ
【原作】アンリ・ミュルジェの小説『ボヘミアンたちの生活情景』
【舞台】1830年頃、パリ

あらすじ

第1幕

あるアパートの屋根裏部屋で、ボヘミアンと呼ばれる芸術家の卵たちが貧しいながらも陽気に共同生活をしていました。クリスマス・イヴの夜、街に繰り出す仲間を先に行かせ、詩人ロドルフォだけは原稿を仕上げるため一人残ります。そこへ、ロウソクの火をもらいに隣人のお針子ミミがやって来ますが、ミミは戸口で鍵を落としてしまいます。風でロドルフォのロウソクも消えてしまい、二人は手探りで鍵を探します。暗闇の中、二人の手がふれあい、二人は恋に落ちたのでした。

第2幕

クリスマス・イヴで賑わうパリ。ロドルフォは、カフェ・モミュスで先に愉しんでいた仲間たちにミミを紹介します。そこへ今度は仲間の画家マルチェッロのかつての恋人ムゼッタが現れます。始めはぎこちなかったものの、再度お互い惹かれあった二人はよりを戻します。そして、4人のボヘミアンと2人の娘は、ムゼッタのパトロンだった男に勘定を押しつけて、笑って帰宅したのでした。

第3幕

年は明けて、2月。マルチェッロとムゼッタが働く酒場に、ミミが訪れます。ミミはマルチェッロに、自分の恋人ロドルフォが最近冷たいことを相談しにきたのです。そこにロドルフォが現れたのでミミは物陰に隠れましたが、彼がマルチェッロに「ミミを愛しているが、彼女は結核を患っており、貧乏の自分には面倒が見切れない。別れる方がいい」と言うのを聞いてしまいます。ミミがいるのに気づいたロドルフォは彼女に駆け寄ります。二人は愛を確かめ合いながらも、お互いのために別れる決心をしました。一方のマルチェッロも浮気の多いムゼッタと口論になり別れてしまいます。

第4幕

しばらくして元の屋根裏部屋。相変わらずボヘミアンの4人は貧しいけれど陽気に暮らしています。そこへ、ムゼッタが瀕死のミミを連れて駆け込んできます。ミミは愛するロドルフォの元で最期を迎えたいと望んだのでした。彼女のために薬を買おうと、仲間たちはお金の工面に出掛けていきます。二人きりになったロドルフォとミミは、楽しかった日々を語り合いました。そして、みんなの帰りを待っていたかのようにミミは静かに息を引き取ります。部屋にはミミの名前を叫ぶロドルフォの声がこだましたのでした。

“冷たい手を～私の名はミミ～愛らしい乙女よ”

第1幕で二人の手が触れ合い、恋に落ちる場面です。ロドルフォがアリア“冷たい手を”を、それに応えてミミが“私の名はミミ”でお互いに自己紹介をします。そして、二人の二重唱“愛らしい乙女よ”へと続きます。惹かれ合う二人の心情を歌った場面です。

ひとこと

語るまでも無く、音楽史に残る名作です。
タイトルの「ラ・ボエーム」とは、当時のパリで夢を追いながらボヘミア的に貧しい生活を送っていた若い芸術家たちを指しています。儚い一瞬を切り取った様なお話ですが、心揺さぶられます。あっという間にその場に連れて行かれて、お話の中にいる自分に気が付く。そして最期を一緒に看取るのです。どうにもならない現実と愛すべき人々に囲まれます。プッチーニには敵いません。
さて、同時期にレオンカヴァッロも全く同じ台本でラ・ボエームを作っておりました。スコアも現存し、演奏可能な状態ですが、聞いたことはありません。圧倒的な差が付いちゃいました。この事がきっかけで二人の仲は険悪になったそうです。

❀『アンドレア・シェニエ』*Andrea Chénier*／“祖国の敵”

解説：森光政浩（Tb.）

【作曲】ウンベルト・ジョルダーノ（1895～96年）　【初演】1896年3月28日　ミラノ・スカラ座
【原作】ジュール・バルビエの戯曲『アンドレア・シェニエ』　ポール・ディモフ『アンドレア・シェニエの生涯と作品』
【舞台】18世紀後半、フランス革命期のパリ

あらすじ

伯爵邸では今日もパーティーが開かれています。召使いジェラールは貴族の贅沢な生活を嫌悪していました。客の一人だった詩人アンドレア・シェニエも、貴族階級に批判的でした。理想を追い求めるシェニエの姿に、伯爵令嬢マッダレーナは恋をします。

5年後のパリ。フランス革命は頂点に達し、革命政府による恐怖政治が行われています。ジェラールは革命政府の中で出世しており、思いを寄せるマッダレーナを捜していました。とうとう彼女を捜し出し、一緒にいたシェニエに出会います。ジェラールは、穏健派の彼が革命政府のブラックリストに載っていることを教え、マッダレーナと共に逃げるように言います。

数日後、シェニエは革命政府に逮捕されてしまいます。ジェラールは、彼を裁判所へ送る告発状にサインをします。ジェラールのもとへマッダレーナが現れ、シェニエを助けてほしいと懇願します。彼女の愛の深さを知り、ジェラールは自分の恋をあきらめ、裁判でシェニエを弁護しますが、死刑の判決が下されてしまいます。

監獄でシェニエは辞世の詩を詠んでいます。マッダレーナは監獄の看守を買収して、シェニエと一緒に死刑になる予定だった女性と入れ替わります。そして愛し合う二人は共に断頭台の露と消えたのです。

“祖国の敵”

第3幕でジェラールが自らシェニエの告発状を作成する場面です。その行為が自分の信じる理想高き革命のためではなく、もう一度マッダレーナに会いたいという自分の欲望のためではないだろうか、と思い悩むジェラールの心情が歌われています。

ひとこと　楽譜出版社ソンゾーニョ社の唯一の成功作品となりました。しかし、残念ながら一般にはあまり知られていません。ヴェルディやプッチーニを擁したリコルディ社があまりに強烈だったのでしょう。オペラの構成は、暗いお話の割に、感情的・劇的で珠玉のアリアがふんだんに散りばめられ、知る人ぞ知る名作です。

❀『カヴァレリア・ルスティカーナ』*Cavalleria Rusticana*／“讃美歌～ママも知るとおり～間奏曲”

解説：森光政浩（Tb.）

【作曲】ピエトロ・マスカーニ（1888年～1890年）
【初演】1890年5月17日　ローマ・コスタンツィ劇場
【原作】イタリアの小説家、ジョヴァンニ・ヴェルガによる小説（1880年出版）　題名は「田舎の騎士道」といった意味である。
【舞台】シチリア

あらすじ

トゥリッドゥはかつて美しい娘ローラの恋人でしたが、ローラは彼の兵役中に馬車屋のアルフィオと結婚してしまいます。除隊後帰郷したトゥリッドゥは、ローラを忘れるべく、村娘サントゥッツァ（サンタ）と婚約しますが、結局はローラと逢引を重ねる仲に戻ってしまいます。

これを知ったサンタは、怒りのあまりそのことをアルフィオに告げてしまいます。アルフィオは激怒し復讐を誓い、一方で我に返ったサンタは事の重大な展開に後悔します。ここで場を静めるかのように静かに“間奏曲”が流れます。

教会のミサが終わり、男たちはトゥリッドゥの母ルチアの酒場で乾杯します。アルフィオとトゥリッドゥは決闘を申し合わせます。トゥリッドゥは酒に酔ったふりをしながら母に「もし自分が死んだらサンタを頼む」と歌います。トゥリッドゥが酒場を出て行きしばらくすると「トゥリッドゥさんが殺された」という女の悲鳴が2度響き、村人の驚きの声と共に、幕が閉じます。

“讃美歌～ママも知るとおり～間奏曲”

教会の外で賛美歌を歌った直後に主人公サントゥッツァ（サンタ）はトゥリッドゥの母に自分の思いをロマンツァとして告白します。この物語の中核をなすアリアです。前半はこれまでの経緯を語り、そしてローラへの嫉妬と恨み節になります。母ルチアは「この復活祭に何て言うことを言い出すの?」と窘めますが、最終的に哀れなサンタの救済を神に祈ります。この告白からサンタはアルフィオに事の次第を告げてしまいます。その際にこのアリアの中で使われたチェロによる「嫉妬のテーマ」も合わせて提示されます。
戦争が生んだ悲劇（兵役中に恋人が結婚してしまった）と見るのか、何処にでもある刃傷沙汰と見るかはそれぞれの主観的問題として、美しく敬虔な田舎で起きた、何とも切なく痛ましく儚いお話です。
※「讃美歌～天のお妃さま～ママも知るとおり」まで連続演奏。「間奏曲」はオルガン部分を木管も一緒に演奏する譜面を使用。

ひとこと　本当に短いオペラですが密度は濃いです。兵役により人生の行き違いを起こした二人の結末を描いた切ない物語ですが、面白いのは普通脇役として描かれるべき被害女性（サントゥッツァ）の視点で語られている所です。全面に敬虔なカトリックの思想がちりばめられ、さらに美しさと儚さ、気高さが香りたつ作品です。

『アイーダ』*Aida*／“凱旋の合唱と凱旋行進曲”

解説：森光政浩（Tb.）

【作曲】ジュゼッペ・ヴェルディ（1870～71年）
【初演】1871年12月24日　エジプト、カイロ・王立歌劇場
【原作】オーギュスト・マリエット・ベイの草稿に基づくカミーユ・デュ・ロークルのフランス語の台本
【舞台】古代エジプト

あらすじ

古代エジプトの首都メンフィス。敵国エジプトの奴隷となっていたエチオピア王女アイーダは、エジプトの将軍ラダメスと秘かに愛し合う仲となっていました。そんな中、ラダメスはエチオピア討伐の命を受けます。

アイーダは恋人への愛と祖国への想いに思い悩みます。ラダメスに思いを寄せるエジプト王女アムネリスは、その様子をみて恋敵だと確信します。

戦いはエジプトの勝利に終わり、エジプト国王は凱旋したラダメスに娘のアムネリスを与え、将来自分の後を継ぐように言います。エジプトの捕虜に身を隠していたエチオピア国王アモナスロは、娘のアイーダにラダメスからエジプト軍の機密情報を聞き出すように言います。

アイーダはラダメスに国を捨てて二人で一緒に暮らそうと誘います。ラダメスも思いを同じくし、エジプト軍が配備されていない「ナパタの谷」を行けば逃げられると伝えます。この話を聞いていたアモナスロは正体を明かします。そこへアムネリスが現れますが、ラダメスはアイーダとその父を逃がしてやります。

軍の機密を漏らしたラダメスは死罪となります。彼の命を救いたいアムネリスは、アイーダへの想いを捨てれば命を助けると言いますが、ラダメスはそれを断ります。

ラダメスは地下牢に生き埋めになります。その暗闇の牢に、なんとアイーダの姿がありました。彼女は牢が閉じられる前に忍び込んでいたのです。二人は抱き合いながら静かに死を待ちます。地上の神殿ではアムネリスがラダメスの冥福を静かに祈って幕となります。

“凱旋の合唱と凱旋行進曲”

アイーダといえばこの曲。第2幕、エジプト軍がエチオピアに勝利した場面で使われます。（通常舞台上で演奏される）アイーダトランペットのファンファーレと弦楽合奏が掛け合いを行いながら盛り上がったところで合唱が入ります。間にアイーダトランペットのファンファーレ、バレエ（木管楽器が激しく動くところですね）などが入りながら曲は豪華さを増していきます。合唱（民衆）は次のように歌います。～エジプトと神聖な大地を守ってくれるイシスに栄光を デルタ地帯を治める王に 喜びの賛歌を高らかに歌おう!～

ひとこと　ヴェルディは古代エジプトの肖像画を見て、アイーダトランペットを作らせたようです。バルブが1本しかなく、出せる音が限られているのですが、舞台の左右に分かれた（複数の）アイーダトランペットは微妙に（2度）調性を変えています。この技法により有名な中間部のファンファーレが色彩豊かに奏でられます。ところがこのアイーダトランペット、僕らが通常使う管より若干長く、輝かしい音を出すのは難しいです。ただ、当日応援に来てくださる京都ファインアーツ・ブラスさんなら心配いりません!（今回はファンファーレトランペットを使用します）

名古屋テアトロ管弦楽団／合唱団の船出にあたって

コンサートマスター　髙橋　広

上井代表から「名古屋テアトロ管弦楽団＆合唱団(以下テアトロ)の成り立ちについて何かを書け」というお達しを頂きましたが、団の成立状況などについては、一番お詳しい代表のあいさつに譲ることにし、あくまでも私が関わってきたテアトロのこれまで、というようなところを綴ってみたいと思います。

上井さんと私はどちらも、愛知祝祭管というオケに在籍しています。そこでは、現在四年がかりで『ニーベルングの指環』という史上最大のオペラの全曲演奏に取り組んでいます総上演時間が15時間に及ぼうかという、いわば究極のドイツ音楽に挑戦している訳です。私は一般的なアマオケ奏者のご他聞に漏れず、クラシックにおける自分の「教養体系」はもっぱらバッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ワーグナー、ブルックナー、マーラーというようなドイツ・オーストリアものが中心に成り立っています。ロッシーニやヴェルディやプッチーニを輩出したイタリアオペラというものが存在することは知っているものの、おっかなびっくりちょっとだけ聴いて、「やっぱりよくわかんないや」と諦めてしまう、私にとってはそんな存在でしかありませんでした。

そんな次第で、ほんの一年前までは私はイタリアオペラについて、いってみれば本日ご来臨下さったお客様の中で、最もイタリアオペラのことを知らない方と同じか、それ以下程度の知識しか持ち合わせていませんでした。ただ愛知祝祭管で共にスタッフとして運営に携わっていた上井さんは、ことあるごとに「イタリアオペラは本当にいいよ」「いつか是非、オケと合唱団が一緒になったイタリアオペラ団体を作れたらいいな」などと話されていて、こちらとしても「そんないいものなのか」という漠然とした感覚を抱いていたさなか、突然上井さんから、テアトロを立ち上げる話と同時に、コンマス就任を要請されました。上記のようにイタリアオペラの知識が殆どないということで当初は大いに逡巡しましたが、何より上井さんという人物への信頼感とともに、上井さんの「とにかく愉しい雰囲気の団にしたい」という思いに共感を抱き、さらに上井さんをそこまで言わしめるイタリアオペラなるものに真正面からぶつかってみたいという気持ちも湧き、引き受けさせて頂きました。

いざ蓋を開けてみると、これまで感じていた「とっつきにくさ」が嘘のよう。今回の演目であるヴェルディやプッチーニを初めとするどの曲も非常にストレートなメッセージがダイレクトに心に突き刺さってくる音楽で、これまで敬遠気味だったのが何とも勿体なく感じられるほどでした。じっくりと咀嚼し、思索した上で作曲家が本当に言いたかったことが徐々に見えてくるドイツ・オーストリア音楽(勿論そのあり方はそのあり方で大変面白いですが)とは違い、練習初日からゴールが見えるというのか、弾けて楽しみながら本質へと肉薄していける面白さが強烈に感じられました。とはいえ、やはりオケなり合唱団なりを新たに立ち上げることは並大抵のことではなく、当初は中々人が集まらなかったのも事実。どのオケ・合唱団でも経験する産みの苦しみですが、それでも初めから不思議なほどの一体感と親密感が醸し出されており、そのムードは参加者が徐々に増えていっても変わることなく現在に至っております。やはり上井代表のコンセプトが団員に浸透し、一人ひとりがいい音楽を目指し厳しく努力しながらも、一緒に音楽する仲間へのリスペクトや愛情を持ち続け、何より楽しもうという意識が根本にあるからでしょう。

よせばいいのに(と当初は思っていました)代表が、本日の第一回演奏会の前に、3月の武豊でのチャリティーコンサートをセットしてしまった時は、7月なら何とか間に合うだろうに、3月の演奏会なんて本当に開催出来るのか、と懸念していました。ですが、何の何の、指揮をして下さった中村暢宏先生のツボを押さえたご指導と、情熱がほとばしる豊かな音楽とに導かれ、このチャリティーコンサートは自分達として出来すぎなほどの演奏会となりました。一度本番を経験出来たこと、それも中村先生のお蔭で非常に内容の濃く深い本番を経験出来たことはテアトロの大きな財産となっており、その成果は本日の演奏にも確実に脈打っていることでしょう。

本日指揮をして下さる佐藤正浩先生は、現在本邦イタリアオペラ界では欠くべからざるマエストロで、各地を飛び回って精力的に指揮をされています。名古屋でも、たとえば昨年の名古屋二期会のプッチーニ『蝶々夫人』公演も指揮されています。幸い私は当地の名歌手・渡部純子さんが素晴らしいタイトルロールを歌われた公演を拝聴しましたが、佐藤先生は隅々まで血が通い、心がこもりながらも知的にしっかりと統御された音楽を構築されていました。このような名匠に指揮して頂くのは出来たてほやほやの新米団体としてはあまりに勿体ないお話ですが、それだけにその有難さを十二分に噛み締め、より深くより熱く、そしてより愉しく音楽を紡いでいきたいと思っております。

東京にはイタリアオペラの公演を行うアマチュアオーケストラもいくつか存在しています(私の大学オケ時代の後輩が偶然にもそのうちの一つでコンマスを務めておられている御縁で、一度拝聴させて頂きましたが、素晴らしい舞台でした)が、名古屋テアトロはオケと合唱団が同時創設されてイタリアオペラに取り組むという、全国的に見ても他に類を見ない団体だと思います。メンバー確保、団体としてまだ成熟過程にあることなど、これからクリアしていかなければならない課題も多いですが、何より仲間を愛し、音楽を楽しむ陽気な集団として、これからテアトロが益々大きく育っていくことを願い、また確信しております。ともあれ皆様、今日はとことんお楽しみ下さい！！

イタリアオペラ雑記帳

アドバイザー
中原　憲

客席にお出での皆様それぞれにオペラとの関わりは様々でしょう。ここでは、すでにオペラをよくご存知の方にもこれまで馴染みのなかった方にも興味を持っていただけるようなテーマを取り上げ、思い付くままに書き進めようと思います。

本日のプログラムは、名古屋テアトロ管弦楽団／合唱団のお披露目公演としてイタリアオペラのエッセンスを満載した少々欲張ったものとなっています。一般にイタリアオペラの黄金時代（注１）と言われる19世紀初頭からのほぼ100年のうち、後半50年を支えたヴェルディ、プッチーニ、マスカーニ、ジョルダーノという４人の作曲家の作品をほぼ時代の流れを追って聴いていただく構成で、ソロや二重唱における声の魅力や合唱の力強い響き、オーケストラの心躍るリズムや涙腺を刺激するカンタービレといった“歌の国”イタリアのオペラならではの醍醐味を存分にお楽しみいただけると思います。

ジュゼッペ・ヴェルディ

ジャコモ・プッチーニ

ピエトロ・マスカーニ

ウンベルト・ジョルダーノ

（注1）　このイタリアオペラの黄金時代はおおよそ３つの時期に分けることができます。前期はロッシーニ、ドニゼッティ、ベッリーニといった作曲家によるベルカントオペラ（美しい声で高音の装飾音などの技巧を聴かせる作品）の時代、中期は歌とドラマの融合が進んだヴェルディの時代、後期は甘く感傷的なメロディーが特徴のプッチーニとレオンカヴァルロ、マスカーニ、チレーア、ジョルダーノなどによるヴェリズモオペラ（主に日常の生活を題材に人間の感情のリアルで劇的な表現を志向する現実主義の作品）の時代です。

イタリアは古くからアルプスより北に住む人々にとって特別な土地でした。それは南の明るい太陽への憧れ、先進の芸術文化に対する憧れによるものでしょう。transalpino（トランサルピーノ）はイタリアから見てアルプスの向う側すなわち北側の国々を指すイタリア語ですが、musica transalpina（ムージカ トランサルピーナ「アルプスの彼方の音楽」）と言う場合はイタリア音楽を意味するのだそうです。北ヨーロッパの人々がイタリア音楽に対して抱く特別の感情（尊敬、憧憬）が窺える良い例だと思います。

イタリアに憧れを抱くアルプスの北側の人々。ドイツの文豪ゲーテ（1749～1832）もザルツブルグの神童モーツァルト（1756～1791）も例外ではありませんでした。

先にイタリアを訪れたのはモーツァルト。1769年12月、13歳のモーツァルトは父に伴われて念願のイタリア旅行に出発します。イタリアはオペラの本場であるだけでなく器楽でも時代をリードする存在でした。父レオポルドにとって、神童と言われる年齢のうちに息子を本場に売り込むとともに、流行のオペラや最先端の音楽に触れさせることが是非とも必要だったのです。ローマ、ナポリに至る１年３ヶ月の旅は続く２度のミラノ訪問と合わせて後のモーツァルトに多大な影響を与えました。

一方ゲーテにとってもイタリアは若い日から憧れた土地でした。1786年9月、ワイマール公国の多忙な政務や年上の人妻との叶わぬ恋の悩みによって詩人としての活動を閉塞させていた37歳のゲーテは、周りに告げることなく逃げるようにイタリアに旅立ちます。1年10ヶ月に及ぶ旅。夢に見たイタリアの自然や芸術に触れることでゲーテは芸術的にも人間的にも均整と調和を求める古典主義への志向を一層深め、詩人としても再生を果たすことになります。後にこの旅行中に記した詳細な日記や故国の友人に送った書簡などに手を加えて刊行したのが『イタリア紀行』(1816) です。

前置きが随分長くなりましたが、オペラ(注2)とは何かという話に進みましょう。簡単に言えば音楽と演劇とが合体したもの。様々な要素からなる最も贅沢な舞台芸術と言えるでしょう。音楽の要素としては作曲、声楽(ソリスト・合唱)、器楽(オーケストラ)があり、演劇的な要素には演出、演技に加えて原作、脚本といった文学の要素、大道具・小道具などの舞台装置や照明、衣裳、メイクといった美術の要素も含まれます。さらにはバレエなどの舞踊が加わることもあります。舞台上の歌い手やピット内の指揮者、オーケストラだけでなく、お客様の目に触れないところで多くのスペシャリストが関わって初めて公演が成り立つ、まさに舞台芸術の極みです。

(注2) オペラ=opera (伊) という言葉は、ここで話題にしているオペラ (=歌劇) だけを意味するものではありません。広く"仕事"やその成果である"作品"という意味を持っています。ピンポイントでオペラ (=歌劇) を指す言葉としては opera lirica があります。opera はもともとラテン語のopusの複数形が語源とのことですが、独語や英語ではopusがそのままの形で使われていて、Beethoven / Sinfonie Nr.5 c-moll op.67 と作品番号を表わすop.はこの省略表示です。

では、このようなオペラはどのように誕生したのか、その起源についても触れておきましょう。それは今から400年以上前、16世紀末のイタリア中部の都市フィレンツェの宮廷にまで遡ります。ギリシア・ローマの古典文化の復興を目指すルネサンスの潮流に乗って、宮廷内の「カメラータ」と呼ばれる作家や詩人、音楽家などの芸術家の集まりが、当時すでに忘れ去られていた古代ギリシア悲劇の本来の上演形態を探る過程で生まれたのがオペラだと言われているのです。ギリシア悲劇に不可欠のコロスと呼ばれる集団は台詞を単に朗詠したのではなく、歌っていたのではないかとの疑問が出発点でした。長く忘れられていたというのですから、衣裳や舞台の様子は古い絵から推測することが可能だとしても、音の再現となるとさぞたいへんな作業だったことでしょう。オペラの音楽にフロットラ(frottola)やマドリガーレ(madrigale)、コッメディア・デッラルテ(commedia dell' arte)といったイタリア伝統の世俗歌曲や芸能の影響があったことは否定できないとしても、少なくともその誕生のきっかけはギリシア悲劇にあったということです。オペラはルネサンスの副産物と言ってもいいかもしれません。

この古代ギリシア悲劇、学生時代にギリシア国立劇場の来日公演を観ています。演目はアイスキュロスの「縛られたプロメテウス」(注3)。会場は渋谷のNHKホールでした。アイスキュロス(紀元前525年頃〜紀元前456年頃)はギリシア悲劇の確立した人物と言われ、ソポクレス、エウロピデスと共に古代アテナイ(アテネ)の3大詩人に数えられています。ギリシア悲劇は仮面を着けたごく少人数の俳優とコロスの掛け合いで進行します。俳優は舞台上で語り、コロスは終始舞台前の半円形のオルケストラ(注4)と呼ばれる場所に留まって踊り歌ったとされます。しかしながら、私が観た公演では俳優とコロスは同じ舞台平面で演じていたように記憶しています。言葉も古代ギリシア語ではなく現代語に移されていました。

(注3) 女優の吉永小百合さんの卒論(早稲田大学第二文学部西洋史学専修)のテーマは「アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』におけるアテネ(アテナイ)の民主制について」で、高い評価を受けたそうです。

(注4) オペラではこのオルケストラと呼ばれる場所に楽団が演奏するピットが設置されたため、その楽団のことをオーケストラ(orchestra)と呼ぶようになりました。

イタリアオペラとドイツオペラの違いや私がオペラと出会ったきっかけ等々にも触れたかったのですが、与えられたスペースも残り少なくなりました。ここまで取り留めのない話にお付き合いいただいた皆様にお礼を申し上げるとともに、新たなイタリアオペラファンの誕生を祈りつつペンを置くこととします。

ミラノスカラ座

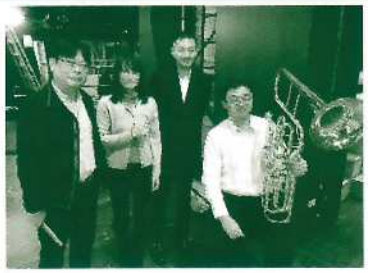
テアトロの１年の歩み　～設立から記念コンサートまで～

2016年4月29日(金・祝)、6月19日(日)、11月27日(日)
名古屋テアトロ ソリスト ロビーコンサート(東海市芸術劇場)

2016年7月30日(土)
オーケストラ・合唱団 第1回合同練習(東海市芸術劇場 大練習室)

2016年12月25日(日)
オーケストラ・合唱団合同　Xmas&忘年会(東海市 Oh-o!my FISH!)

2017年3月5日(日)
知多半島　春の国際音楽祭2017出演(武豊ゆめたろうプラザ) ゲスト 水野紗希さん(Vn)



2017年3月19日(日)
第1回 佐藤正浩マエストロ練習(東海市芸術劇場 リハーサル室)

2017年5月3日(日)
第2回 佐藤正浩マエストロ練習(半田福祉文化会館 講堂)

共演団体・出演者紹介

京都ファインアーツ・ブラス

【出演者】
アイーダトランペット1／伊豆田和也　鶴田鋼司　能勢秀之
アイーダトランペット2／伊豆田恭子　北村雅紀　早川弥生
コルネット／1貝發達也　2笠江宣貴　3北村美繁
トロンボーン／1柏本千鶴　2北岡あや　3藤本雅巳
テノールチューバ／小野道生
チューバ／1中西ようこ　2竹内信也

関西東海地方在住の金管楽器愛好者が集まり、1994年2月に結成。トランペット、ホルン、トロンボーン、チューバ、打楽器により構成し、現在団員24名。
1994年7月に第1回演奏会を京都市で開催して以来、ブラス・アンサンブルの素晴らしさをより多くの人に紹介し、自らも心底楽しもうとこれまで18回の自主演奏会や日本各地でのブラス・フェスティバル参加、教育機関や様々なイベント等での演奏会を開催し精力的に音楽活動を行っている。
2008年8月には、フランス・リモージュ市で開催される「エプシロン・ブラス・フェスティバル」に招待され、フランス国内で4回の公演を開催した。2012年3月10日、11日には、岩手県奥州市前沢にて東日本大震災の追悼イベントや街角コンサートに参加した。
演奏会ではルネサンス期から現代まで幅広い作品を取り上げ、編成もTp4・Hr・Tb4・Tubaの10重奏のスタイルを中心としつつも、3重奏のような小編成から全員合奏の大編成まで柔軟に組み替えている。また、レスピーギ：ローマの松、マーラー：交響曲第2番「復活」、第8番「千人の交響曲」、ヤナーチェク：シンフォニエッタ、ワーグナー：楽劇「タンホイザー」等のバンダとして各地のオーケストラと共演。
各団員はそれぞれ関西、東海のオーケストラ、吹奏楽団等で活動を行っており、活動範囲は非常に多岐にわたっている。

グランフォニック

東海地区在住の、全国のグリークラブ出身者が中心となって集まった合唱団で、1994年の結成です。1年半ごとに定期演奏会を開催し、より高度な水準の男声合唱を目指して、創作・編曲に限らずオリジナル作品を発表してきました。外国語（ドイツ語、イタリア語、英語、ロシア語他）の曲にも取り組んでおります。今回は「名古屋テアトロ管弦楽団／合唱団設立記念コンサート」にお誘いをいただき、ありがとうございます。早口のイタリア語に悪戦苦闘しましたが、著名な佐藤正浩先生のご指導の下、団員一同張り切って練習してまいりました。そして本日のオペラ演奏にのぞみます。
2018年5月27日（日）には、ここ東海市芸術劇場で第15回定期演奏会を開催予定です。北原白秋作詩、多田武彦作曲の「東京景物詩」、三木稔作曲の「レクイエム」、ディズニー名曲集（オリジナル編曲で振り付けあり）を取り上げます。現在団員募集中です。詳しくはホームページをご覧ください。「グランフォニック」で検索できます。男声合唱に興味のある方、名古屋に転勤してきて合唱団をお探しの方、ぜひ見学にいらしてください。

【出演者】

トップテノール	セカンドテノール	バリトン	ベース
三ツ松　平	柴田　道昭	永井　一美	井ノ口貴敏
鹿住　誠	三ツ口勝弥	寺島　正晃	浅井　良之
伊藤　高潤	石井　清	細江太喜雄	外村　俊夫
小林　武	間瀬　譲	水野　邦明	松原　成憲
鈴木　英孝	飯田　公男	安田　俊哉	小嶋　聡
黒岩　実	松浦　治徳	芝木　昌一	成井　詔彦
小宮　俊英	河内　幸雄	天野　浩	村上　信
榎本　真丈	高橋　淳一	近藤　峯生	木村　文隆
石川　周二	松永　鐘治	荒田　武	渡邊　該
高津　眞司	丸山　武夫	木全　和明	羽原　知宏
中川　暢			

Players

名古屋テアトロ管弦楽団

第1ヴァイオリン
荒井　歩
桑元　紳
小嶌　幸子
◎髙橋　広
髙橋信太郎
長谷　恵

第2ヴァイオリン
○上北　洋
神子有理子
神子　卓也
川辺　雅士
廣岡　知芳
松江　美咲
村田　剛

ヴィオラ
青山　泰子
岩田奈緒美
金山　知美
小南　美穂
篠塚　晋吾
○本間　理恵
近田　滋
水野　久美

チェロ
荒川伽耶子
○池田　明宏
魚住千恵子
熊田由紀子
小南　哲也
谷崎　悠太

コントラバス
加藤　考一
高木　美緒
早川　浩一
○横山　知広

フルート
今井　千香
○門野富美子
中川　志保

オーボエ
大島　由衣
栗山　才子
○米津　孝子

クラリネット
小林　双美
杉江　朋美
○中田　早苗

ファゴット
○加藤美佐子
小合　史大

トランペット
○竹田　大輔
蛭田　絵美
布施　嘉春
吉田　陽一

ホルン
小林　文也
○寺田美里香
名倉　一成
矢藤　瑶子

トロンボーン
上井　隆志
○國枝　直宏
松本由香理
森光　政浩

チンバッソ
佐藤　悦雄

パーカッション
淺野　晃次 ※
植田　誠
○佐藤祐美子
前島　里菜 ※

ハープ
神谷知佐子 ※

オルガン
新村　茜 ※

◎ コンサートマスター　○ パートリーダー　※賛助

名古屋テアトロ合唱団

※賛助：アンサンブル ソラーリス

ソプラノ
安部紗智子
井上祐三子
岩越加代子
大塚　聡美
小澤　智子
加藤　由実
金子　理香
河村由美子
近藤　和美
斎藤　由華
齋藤　ゆみ
杉浦恵美子
鈴木　信乃
多和田浩子
塚本　治子
外山　佳子
中尾志保子
永田　真弓
坂納　時子
宮田　靖子
安田　昌代
山口　陽子
山本しのぶ
山森　理子

アルト
岩崎　暁子
大熊真知子
加藤　陽子
樺山由美子
川添　京子
神戸　正子
鬼頭　康美
鬼頭　美香
後藤　弘子
鷲見恵理子
谷上美保子
谷口　佳子
都築　史子
富永美和子
白水美津子
長谷川準子
堀江　みも
山本　馨
吉田　響子

テノール
小出健太郎 ※
坂本　肇 ※
荘司　和彦 ※
田中　純一 ※
野々下　司 ※
蜂須賀一晃 ※
山田　幸保 ※

バス
伊藤　梯司
岩越　正文
小山　陽一
河津　秀治 ※
西　祥濃
森　翔吾 ※
山田　武夫

オーケストラ スタッフ
長谷　恵　上北　洋　本間理恵　熊田由紀子　横山知広　門野富美子　米津孝子　中田早苗　寺田美里香
竹田大輔　國枝直宏　佐藤祐美子

合唱団スタッフ
宮田靖子　斎藤由華　鈴木泰雄　鈴木信乃

オーケストラ代表／上井隆志　合唱団代表／上井雅子　トレーナー／森光政浩　コンサートマスター／髙橋　広
アドバイザー／中原　憲

名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団　第1回公演

プッチーニ「トゥーランドット」全3幕

<コンサート形式> 公演決定!

2018年7月1日(日)　東海市芸術劇場 大ホール

トゥーランドット…基村昌代　カラフ…宮崎智永　リュー…上井雅子
ティムール……伊藤貴之　役人……初鹿野　剛　皇帝……井原義則
ピン……中原　憲　パン……大久保　亮　ポン……坂本　肇　他

チケットのお求め　アイ・チケット 0570-00-5310　clanago.com/i-ticket（クレジット・コンビニ決済可）
芸文プレイガイド 052-972-0430

チケット 2018年2月発売予定

オーケストラ（弦楽器）、合唱団メンバー募集

◎基本的に土曜・日曜に練習を行います。

・アマチュアの方以外に、音大卒の方やプロ演奏家の方も歓迎致します!
・合唱団は年間を通して月に2～4回程度、オーケストラは半年～8か月で月に1～2回程度の練習。
公演近くになると、毎週もしくは隔週で合同練習となります。
・練習会場：名古屋市、東海市近郊

特に合唱団は男声を募集しています

◎参加費（オケ・合唱とも共通）

・社会人：40,000円／年間（チケットノルマ10,000円含む）
・学生・遠方者（東海3県以外）：20,000円／年間（チケットノルマ6,000円含む）
・ご夫婦で参加の場合：お二人合計60,000円／年間（チケットノルマ16,000円含む）
※月払いや分割支払いも可能ですので、お気軽にご相談ください。

【お問い合わせ】　名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団　上井隆志

平日昼間／080-2640-9278　平日夜間・休日／090-5604-9656
●メール　taka.uwai@gmail.com
●楽団ホームページ　http://uwai76.wixsite.com/teatro-alla-nagoya

名古屋テアトロ　検索

名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団 設立記念

Teatro Nagoya

イタリアオペラ ガラコンサート

Concerto di Gala "Opera Italiano"

Soloist

ソプラノ 上井雅子
メゾ・ソプラノ 大田亮子
テノール 宮崎智永
テノール 坂本 肇
テノール 鈴木泰雄
バリトン 中原 憲

バンダ 京都ファインアーツ・ブラス

名鉄名古屋駅から15分

指揮 佐藤 正浩

管弦楽 名古屋テアトロ管弦楽団
合 唱 名古屋テアトロ合唱団
男声合唱賛助 グランフォニック

2017 7/2(日)

14:00開演(13:15開場)

東海市芸術劇場
大ホール

入場料 2,000円(全席自由)
※未就学児の入場はご遠慮ください。

主催○名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団
後援○東海市教育委員会

Program

ヴェルディ
「ナブッコ」より
"序曲～祭の飾りを"
「椿姫」より
"前奏曲～乾杯の歌"
"燃える心を"
「ドン・カルロ」より
"我らの胸に友情を"
"ここに喜びの日があけた"

プッチーニ
「マノン・レスコー」より"間奏曲"
「ラ・ボエーム」より"冷たい手を～私の名はミミ～愛らしい乙女よ"

ジョルダーノ
「アンドレア・シェニエ」より
"祖国の敵"

マスカーニ
「カヴァレリア・ルスティカーナ」より
"讃美歌～ママも知るとおり～間奏曲"

ヴェルディ
「アイーダ」より
"凱旋の合唱と凱旋行進曲"

東海市芸術劇場 大ホール 愛知県東海市大田町下浜田137(ユウナル東海内) TEL0562-38-7030

●公共交通機関をご利用の場合／名鉄「太田川駅」直結(駅西側) 金山総合駅より中部国際空港・河和・内海方面(約11分)
●車をご利用の場合／西知多産業道路「加家IC」または「横須賀IC」より約2km(約5分) 知多半島道路「大府東海IC」より国道155号線で約5km(約10分)
駐車場:劇場地下駐車場(140台)をご利用ください。【入庫】7:00～24:00 【出庫】24時間対応 【利用料金】30分まで無料、30分以上24時間未満:100円／30分(上限2,000円)

チケット取り扱い 2017.2/25(土) 発売開始
アイ・チケット 0570-00-5310
clanago.com/i-ticket (クレジット・コンビニ決済可)
芸文プレイガイド 052-972-0430

お問い合わせ
名古屋テアトロ管弦楽団/合唱団 上井隆志 090-5604-9656
taka.uwai@gmail.com
http://uwai76.wixsite.com/teatro-alla-nagoya
名古屋テアトロ 検索